

# 〈共同研究報告〉 古代和歌集の受容史的研究

磯部 祥子  
小林 真由美

『萬葉集』と『古今和歌集』は、成立時から近代に至るまで、千年以上にわたって日本文学の表現の源泉であり典範であり続けた。二〇一八・二〇一九年度成城大学特別研究助成共同研究「古代和歌集の受容史的研究」は、両集がどのように読まれ、伝えられてきたかという受容史の一端を明らかにしようとするものである。『萬葉集』は小林、『古今和歌集』は磯部が担当し、それぞれ伝来状況を示す資料として知られながら、研究対象とされることが少なかった資料を取り上げ、文献調査を中心とする研究をおこなった。

『萬葉集』については、成城大学所蔵『萬葉集』について調査した。近世中期の製作とみられ、調度本・嫁入り本などと称される豪華な装丁の写本である。調度本の『萬葉集』は他にも数本があることが知られているが、すべて平仮名傍訓という特殊な形式で書写されており、近世における一系統として注目に値するものである。調査の結果、成城大学本『萬

葉集』が活字附訓本の系統であることが明らかになった。

『古今和歌集』については、平安時代末期に成立した藤原仲実著『古今和歌集目録』を研究対象とした。『古今和歌集』歌人の歌数や経歴、当時存在した『古今和歌集』の異本の歌数などを記している。『古今和歌集』に引かれる奈良時代の歌人もその対象であり、天智天皇や平城天皇など歌人別に収録歌数と略伝、逸話の類を記す。平安時代の『古今和歌集』受容の実態を示す一書である。平安文学研究において利用価値の高い資料であるが、本文校訂等のテキスト研究はいまだ手付かずの状態であった。本共同研究の成果として、『古今和歌集目録』第一部の諸本校異を報告する。

『萬葉集』『古今和歌集』享受の歴史は深いが、受容史資料の調査と整備はいまだ途上にある。共同研究期間は終了したが、受容史研究の継続の必要性を感じている。